藤女子大学紀要，第 49 号，第Ⅱ部：11-22．平成 24 年．
Bull. Fuji Women's University, No. 49, Ser. II: 11-22. 2012.

生活科学系大学の地域づくりへの参加に関する考察

── 女子大学生の意識調査および活動実践の検証を通して ──

田　中　宏　実　　岡　崎　伸　子

Abstract

It is extremely important that a university participates in community improvement. However, among the many published reports, the great majority come from architectural/design universities. Therefore, we examined the possibility of universities specializing in the life science participating more in this research in the future. The aim of this study was, through a questionnaire distributed among Fuji University students regarding community improvement, to obtain research material on future methods for implementing community improvement in universities specializing in life science through the investigation of community improvement activities implemented to date. First, we found that students have the desire and ability to undertake a variety of activities based on their areas of expertise. Second, the university requires a system by which engagement in community improvement programs is made easy. Third, it is necessary to make a seemless system of cooperation with the administration toward community improvement.

１．研究の背景と目的

近年、地域貢献の目的や新たな大学像の模索のなかで、大学が地域のまちづくり（「地域づくり」と呼ぶこととする）に参加していく機会が増えている。キャンパスの一部を地域へ開放することや、商店街の活性化や建て替え時期を迎えた団地の再生のために地元に根付いて活動する研究室活動の事例なども紹介されている。大学生がこうした活動に参加することは、専門性を活かした地域貢献が可能となり、また学生が現実の生活環境のあり方について学び、社会に出た時に実践者として生きていくための行動力や企画力を養う有意義な学習の機会になると考える。

現在、大学が地域づくりへ参加している研究報告を調べると、建築や都市計画を専門に学ぶ大学の研究・活動報告が多くある。一方で、生活科学系大学の研究報告はあまりみられない[1)]。住環境を人間生活の視点から総合的に学んでいく生活科学系の大学においても、今後、その専門性を生かし地域づくりへ積極的に参加し、検証していく方向性が模索されていくべきであろう。そこで本稿では、生活科学系の学問を学ぶ大学が地域づくりへ参加していくことの意義について考えたい。

生活科学とは「生活を総合的にとらえ生活改善を目指す実践的な内容と目的を持つもの」[2)]である。現在は、旧来の家政学の流れをふくみつつ、それらを発展させた学問領域として主に女子大学に設置されている場合が多い。内容としては、栄養や服飾など細分化された専門領域を学んでいく学科やコースもあるが、大まかには衣・食・住・生活経営、保育、福祉などの人間生活に関わる諸側面を総合的に学ぶ学問である。これら専門知を学ぶ学生は、他の専門分野を学ぶ大学の学生とは違った地域づくりへの関わり方ができるのではないかと思う。

以上のことから、本研究では、生活科学を学ぶ学生が地域おこしに関わっていくことによる効果や課題について、生活科学系大学に所属する女子大学生の意向を調査して探り、さらに藤女子大学人間生活学科の学生が地元の自治体や市民と協力して取り組んだ事例「ishikari あいロードプロ

Hiromi TANAKA　藤女子大学人間生活学部人間生活学科
Nobuko OKAZAKI　藤女子大学人間生活学部人間生活学科　平成 19 年度卒業生

ジェクト」の活動実践をもとに、これからの生活科学系大学での地域づくりの取り入れ方についての検討材料を得ることを目的とする。

2．調査概要

調査は2段階で行い、それらをもとに考察する。まず一つ目は、生活科学系の学問を学ぶ藤女子大学学生（人間生活・食物栄養・保育学科）2、3年生246人を対象に、2007年10〜11月に実施した。調査方法はアンケート調査で、調査内容は①（校舎がある石狩市の）地域づくりへの関心の有無、②①を答えた理由、③どのような条件があれば参加しやすいか、④学生が発想する大学が地域づくりへ関わっていくためのアイディア、4点を主に調べた。アンケートの配布・回収数は表1のとおりである。配布数246、有効回収数212(人間生活学科76、食物栄養学科67、保育学科69)、有効回収率は約86%である。アンケートへの回答のうち8割(168名)の学生は隣接する札幌市から通学しており、石狩市の居住者は1割程度(22名)であった。

二つ目は、2007年度(今回主に検討するのは4月〜10月までの活動)藤女子大学人間生活学部人間生活学科の主に3年(8名)、4年(4名)生がA研究室のゼミ活動の中で取り組んだ「ishikariあいロードプロジェクト」における地域づくりの活動内容について考察する。調査方法は、観察記録、このプロジェクトにかかわった学生・教員・行政職員へのヒアリング調査である。

3．学生の地域および地域づくりへの意向

地域のまちづくりや催しに（表2）について、「非常に関心がある」「まあまあ関心がある」と回答した学生は全体で74(35%)、「それほど関心がない」「まったく関心がない」は138（65%）で、関心がない学生が関心がある学生の倍近くいることがわかった。学科別にみると、人間生活学科と食物栄養学科で学ぶ学生のうち「関心がある」と答えたのが約4割程度いるのに比べて、保育学科は2割程度しかいなく少ない。生活科学系の大学の中でも個々の専門分野から見ると地域づくりに関心をもつ専門分野と関心を持てない専門分野がある傾向が見られた。

地域のまちづくりや催しに「関心がある」と回答した学生の選択理由について表3をもとに分析する。全体で見ると「大学があるところだから」という回答が35（49%）で最も多く、大学への愛着がさらに大学がある地域への愛着へと派生していっている様子がうかがえた。また学科別にみていくと、人間生活学科では〝風土が好き〟という回答が、食物栄養では〝住んでいるから〟、保育においては〝イベントが好き〟という回答が他学科に比べて多かった。それぞれの学科別にみていくと、理由に違いが現れた。

「関心がない理由」(表4)としては、「通学以外に大学に来ないから」と回答したのが全体の89名で7割あり、学科別にみてもどの学科でも最も多い理由であった。続いて「地域に住んでいないから（市外に居住)」をあげたのが19名で多かった。

表1　アンケートの配布・回収数

学 科 名	人間生活学科	食物栄養	保育学科	全　体
配布数	81 (2年生48、3年生33)	95 (2年生74、3年生21)	70 (3年生70)	246
回収数／回収率	76／約94%	67／約71%	69／約99%	212／約86%

表2　地域づくりへの関心

実数（%）

	非常に関心ある	まあまあ関心ある	それほど関心ない	まったく関心ない
人間生活学科	6（67）	22（34）	40（36）	8（28）
食物栄養学科	1（11）	29（45）	27（25）	10（36）
保 育 学 科	2（22）	14（21）	43（39）	10（36）
全　　体	9	65	110	28

表３　関心がある理由（複数回答）

実数（%）

	住んでいるので	風土がすき	大学がある	地域づくりに興味	地域イベントが好き	住民と関わりたい
人間生活学科	1（ 9）	3（43）	14（40）	4（80）	3（43）	1（17）
食物栄養学科	8（73）	2（28.5）	15（43）	1（20）	1（14）	2（33）
保育学科	2（18）	2（28.5）	6（17）	0	3（43）	3（50）
全体	11	7	35	5	7	6

表４　関心が湧かない理由（複数回答）

実数（%）

	市外に居住	通学以外に来ない	地域を考える機会が無い	催しに触れる機会が無い	関わりたくない
人間生活学科	9（47）	29（32.5）	4（31）	1（25）	0
食物栄養学科	4（21）	23（26）	6（46）	1（25）	1（100）
保育学科	6（32）	37（41.5）	3（23）	2（25）	0
全体	19	89	13	4	1

また「関わりたくない」と回答した学生はほぼおらず、関わりたくないとは思っていないが、地域関わる機会が少ないことが、地域への愛着や地域づくりへの関心が生まれにくいことに影響しているようだ。

「地域づくりへ参加しやすい条件」（表５）について状況と頻度の側面から聞いた。参加しやすい状況については72名（人間生活28人、食物栄養29人、保育15人）の回答があった。一番多かったのが「授業」や「ゼミ活動」として実施された場合（59%）、続いて「学内に学生が地域づくりに関わることを推進していく雰囲気があれば」（50%）、友達と一緒なら（50%）というものであった。学生の参加のしやすさのためには、授業などの大学の既存のシステムの中に、活動をうまく組み込んでいくこと、協働の活動として学生仲間同士で一緒になって取り組んでいくこと、に配慮しながら進めていく必要がある。また地域活動の場所へいくための交通機関利用のための費用（43%）が支払われるかどうかも気にしているようであった。

実施頻度に関しては71名の回答が得られた。実施は月に１～３回（月２、３回と月１回を合わせて）がよいとしているのが47（67%）おり最も多かった。週１回というのも５名ほどいた。逆に半年や年１回というのは併せて19名ほどおり、積極的な意見の学生と、イベント的な開催を望んでいる学生、両方がいる様子も見られた。学生が関わって行う地域づくりの活動の場合は、学生の意向に配慮しつつ、学生が取り組みやすい時間帯などに設定するなどの大学側の工夫や体制づくりが必要である。もし地域の住民や行政の人と行動を共にするようなことがあれば時間も合わないような場合がでてくるかもしれない。そこでもし実施する場合は、時間や場所や内容を踏まえて、どのようなかたちで実施できるかを検討して行く必要がある。遂行するための体制をつくりながら進めていくことが求められる。

表５　参加しやすい条件とは（「参加しやすい状況」についてのみ複数回答）

実数（%）

状況	ゼミ活動	授業	放課後	情報量	学内の推進	研究に合致	友人と一緒	市内在住	交通費
	42（59）	44（62）	20（28）	26（37）	36（50）	15（21）	37（52）	5（7）	31（43）
頻度	週２、３回	週１回	月２、３回	月１回	半年１回	年１回			
	0	5	17	30	13	6			

表６　学生のアイディア　その１

①　『自然』
・雪に関するイベント（人・２）
・雪が降ってきたので、石狩の子供や親御さん達と一緒にかまくら作ったり、おしるこを食べたりしたい(人・２）
・落ち葉を集めて焼きいも（保・３）
・花川キャンパスは自然に恵まれているので、地域の人と大学生が一緒に自然の中で活動ができるような催しがあれば良いかと思う。保育科はそこで子どもへの催しをするといい（保・３）

②　『農業・漁業』
・石狩の漁師の方（青年部）を呼んで、新鮮な魚介類を使い調理実習（人・３）
・石狩の農家の人との関わり（人・３）
・野菜について（地産地消）学ぶ（人・３）
・恵まれた農業地域なので、地域の小学校だけではなく多くの人が参加できる農業体験、またそれきりではなく、収穫祭等も行い皆で食べる等。(保・３）

③　『子ども・保育』
・ボランティアで地域の子どもたちと遊ぶ機会があれば良いと思う（人・２）
・石狩市の公共施設（りんくるや図書館等）を借りて、子育て支援（ペープサートやパネルシアターの上演、絵本の読み聞かせ等）をボランティアとして大学主催で行う（保・３）
・保育を学んでいるので、もっと子どもと関わりをもてる行事を学校でやりたい（保・３）
・地域の（大学周辺）子どもたちに向けて何か大学や場所をお借りして催しものをする（保・３）
・もっと保育系のことが出来ないか、K大学では障がい児を対象とした音楽療育などもしている。広い大学の土地（自然）を利用して、子どもと触れ合えるような何かが出来ないか。(レクみたいなことなど）(保・３）
・放課後の学童児童への活動（保・３）
・子育て中の人の相談にのる（教育相談とか）(保・３）

④　『小・中学校』
・花川南小など小・中学生と一緒に授業を受ける（人・３）
・小・中学校でのレクリェーション（学習指導ばかりではなく、大学で学んでいることを紹介する）(保・３）

⑤　『福祉』
・障がい者の方々とのレクだけでなく、地域にある特養でのレクの企画シャケサンバを広める。(人・３）
・福祉士を取得する人だったら福祉施設などの実習をかねたボランティア（人・３）

⑥　『学校祭』
・学校祭に来る人がもっと増えるような行事があれば良いと思う（保・３）
・学校祭で地域の人と関わる(ポスター等をお店に貼りに行ったりして、地域のお客さんをたくさん呼ぶ)(人・３）
・藤花祭に石狩市障がい者支援センターのりずむっこ（障がいのある方のヨサコイチーム）に参加してもらう。(人・３）
・学校祭で学生が全員参加して何かをアピールするようにして、もっと関わりを深めて、地域の方々へアピールする（現状は自由で、あまり盛り上がってないため）(食・３）

⑦　『大学施設の一般開放』
・セミナーハウスの一般開放…藤の人以外でも気軽に使えるように。(保・３）
・学校の体育館を開放するとか（保・３）
・一般市民への図書館、体育館やテニス・ゴルフコート等の開放（休日など）(人・３）
・マリア様の会（ミサを地域に開放する）(保・３）

⑧　『清掃活動』
・ごみ拾い活動（大学周辺、利用しているバス停など）(人・２、他７件）
・住居計画論の授業で考えたものなのですが、道に捨てられているごみを、地域住民や地域の学校が連携して拾うという運動を行えば、地域のためにもなり、環境教育・地域連帯という面でよい効果が得られると考える。(人・３）

表６　学生のアイディア　その２

⑨　『授業』 ・保育内容（表現）をもっと色んな人に公開する。（保・３） ・大学に一般の人が入れる機会をつくり、地域の人の出入りを多くする。Ex.保育の授業で子ども・高齢者に参加してもらう（人・３） ・授業の一環として、実習のような感じで食事の提供など（食・２）
⑩　『大学内で催し』 ・大学で催しものをたくさん開く、活動を増やす（食・２、他１件） ・大学の地域開放（公開講座？）など（保・３） ・16 条キャンパスで花川の催しをやればもっと人が集まるのではないか（保・３） ・芸術の街石狩（ピアノ等の演奏会を体育館等で行い一般開放する、年に数回ステンドグラスで学校が飾られる、等）（保・３）
⑪　『商品開発』 ・石狩市産のものを使った消臭効果があるもの（スプレーとか消臭剤とか）（保・３） ・北大みたいに藤のお菓子をつくって、北海道土産の定番にする。（食・３）
⑫　『交通』 ・バスの量を増やす活動（食・２） ・交通の便が良くなれば良い。車で「ドライブしにいこうか」と言えるような場所があればいい（人・２）
⑬　その他 ・ボランティア活動（保育の実習をかねる、学童保育（学科関係なく募集してみる）、学科の特性を活かしたもの）（人・２、他５件） ・大学で学んでいることをいかせる活動（保・３） ・お祭り（人・２） ・お菓子を作ってみたい（食・２） ・一日職場体験（保・３） ・カムバックサーモン（鮭の稚魚の放流）（保・３） ・こむぎっこのパンを学校で売る（人・３） ・色んな年齢の方々が参加できる活動だと良いと思う（食・２） ・ｉロードプロジェクトに関わってるので、たくさんの方に石狩に観光に来てもらえる様に宣伝していきたい。ツアーなどがあれば、案内をしたい。（人・３） ・他学科で行っている活動にも参加できるように、学内で宣伝して欲しい。（保・３） ・とにかく授業が忙しいので授業内、ゼミ内で行ってもらえる方がとりくみやすいです。SAT などにも非常に興味があるのですが、毎週いかなきゃだめかな…とか時間が合わないといった問題があって結局行ったことはないです。選択科目でボランティア系を行うものがあってもよいかも。（保・３） ・石狩といっても、ここは石狩のはずれだし、ほとんど札幌の人が多いので、石狩という地域と関わる・関連があるという意識の人が少ないと思います。まずは、学生がその意識を高めることが必要じゃないでしょうか？そのために〝お金のかからない、気軽で参加しやすいイベント〟があれば良いと思います。（保・３） ・札幌に住んでいる人でも、「花川ってどこ？」という人がたくさんいると思います。もっと活性化して、遠いけど○○があるから花川に行こう、と思うような、何か花川にしかないものができれば良いんじゃないかな…と思います。〝何もなくて遠い場所〟というイメージを。（食・２）

＊（　）内は学科と学年。人＝人間生活学科、食＝食物栄養学科、保＝保育学科、２＝２年生、３＝３年生

４．学生の地域づくりへのアイディア

学生が出来る地域貢献や地域と連携できる活動アイディアについて聞いた内容を分析する。発想されたアイディアの種類は全部で 53 個あった（表６その１、その２）。全体を分類してみると、石狩市の自然を生かすイベントの企画（表６①）、地元の特徴である農業・漁業を生かすイベント企画（表６②）、地元の子育て支援（表６③④）、福祉関係の支援（表６⑤）、大学祭を生かした企画・大学内でも催しへの招待（表６⑥⑩）、大学の施設開放（表６⑦）、地域の環境保全活動（表６⑧）、授業を生かした取り組み企画（表６⑨）、商品開発、交通の利便性（表６⑫）等のアイディアが生み出された。

学科別に多かった意見の傾向を見ると、人間生活学科では、農家や漁師との関わりを通した地域

づくり活動、福祉に関する活動やゴミ拾いなどの環境保全に関わる活動提案がだされていた。

食物栄養学科に関しては、商品開発や食事の提供など実際に食品をつくってみるという意見があげられていた。保育学科では、子どもに関連する子育て支援活動を多くあげている傾向があった。地域の子どもと関わりたいと考える学生が多く見られた。

各学科ともそれぞれの専門性を生かしたアイディアを生み出し、地域にもっと関わりたいという意欲を垣間見ることが出来た。

学生のアイディアには、学んでいる学問の知識を生かした多様なアイディアが記載されていた。また学生は自分の専門性を生かした多様なアイディアや具体的な考え方を生み出すことができる可能性を持っていることがわかった。大学の体制の中で、授業や実習、大学祭などのイベントの機会を通して、様々な地域づくりへの参加や、学習への生かし方をさらに検討していく必要があることがわかった。

5．「ishikari あいロードプロジェクト」の考察

5-1　藤女子大学における各学科の地域活動の実践テーマ

各学科の各教員への聞き取りで、地域と連携しておこなっている活動として、2007 年度は表 7 のような活動をしていることがわかった。全部で 15 ケース（人間生活学科 4 、食物栄養学科 9 、保育学科 2 ）あった。授業の中で取り入れている活動もあれば、研究室として行っている活動や、有志を募って行っている活動もあった。

各学科とも、それぞれの専門性を生かした取り組みを行っている。人間生活学科においては、「ishikari あいロードプロジェクト」で、地域の観光資源を掘り起こす作業を地元関係者とともに行っている。また福祉の専門性を生かした福祉ボランティア体験や、教職希望者を育てる専門性を生かした SAT などもあり、地域づくり、福祉、教育分野などの側面で地域づくりへ貢献していることがわかった。食物栄養学科では、食育指導やピンクの発泡酒や石狩バーガーなどの地元の食材を利用した商品開発を地元企業と共に行い、食という専門性を生かした取り組みを実践している。保育学科に関しては、ロードペインティングという芸術表現活動の技術を使った地域づくりへの取り組みを行い地域の活性化につなげていることもわかった。

5-2　「ishikari あいロードプロジェクト」の考察

(1)　「ishikari あいロードプロジェクト」の活動についての分析

実際に藤女子大学人間生活学科の学生が地元の自治体や市民と協力して取り組んだ事例「ishikari あいロードプロジェクト」[3] をもとに、大学が授業などに地域づくりを組み入れていく事例を通じて効果と課題について検討する。まず図 1 を参照し活動の流れを考察する。

「ishikari あいロードプロジェクト」とは、2007 年 3 月に石狩市が策定した「石狩市観光振興計画」[4)5)] の重点プロジェクトの一つである。「恋人の聖地」には恋人たちが多く訪れ、若い人の発想が必要ということで「石狩市観光振興計画書」に大学との連携を位置づけ、藤女子大学の人間生活学科に相談があり、主に藤女子大学人間生活学科のＡ研究室（担当教員とゼミ生の 3 、4 年生計 12 名）を中心に活動に取り組むこととなった。

はじめに行った取り組みは、2007 年 4 月、毎週

表 7　藤女子大学各学科の地域連携活動の例

人間生活学科	① ishikari あいロードプロジェクト ②「人間生活総合演習 II」（福祉ボランティア体験） ③適応指導教室「ふらっとくらぶ」 ④ SAT（スクール・アシスタント・ティーチャー）
食物栄養学科	⑤ピンクの発泡酒「Cana Story」の共同開発 ⑥「いしかりバーガー」の共同開発 ⑦「石狩鍋復活プロジェクト」 ⑧石狩市内幼稚園・保育園への「箸の持ち方指導」など ⑨石狩市内小学校への食育指導 ⑩「おやさい 10 レンジャーの食育教室　～子どもと保護者向けの食と免疫体験型教室～」 ⑪札幌市内保育園への食育指導 ⑫夏祭りボランティア参加 ⑬管理栄養士としてのスキルトレーニングなどの実務研究
保育学科	⑭「ロードペインティング」 ⑮「子育て支援 I ・ II（演習）」

水曜日30分間の放送を行っている。学生は「ｉガールズ」として地元の飲食店に取材に行き、店主から話を聞き、学生の視点から情報を発信する「さっぽろ村ラジオ「ｉロードマスター」」の活動を行っていった。番組の取材では、お店の雰囲気や店主の人柄、おすすめメニューやこだわり等をラジオで伝えるためには、多くの話を聞きだすことが必要であり、またそれを番組の中で自分の言葉として伝える活動は、学生のコミュニケーション力や表現力などを育んでいったのではないかとおもわれる。また行政にとっては、学生がいることで地域へ向けて活動を印象づけ、石狩市の活動に興味を持ってもらう役割を果たしていったのではないかと思われる。

同年4月、藤女子大学人間生活学部の学生と市内の観光スポットを視察する「観光資源見学会」が行われた。市内在住ではない学生の目をとおして観光資源を評価してもらうことがねらいとしてあった。参加した学生の多くは、これまで市内の奥の方まで行ったことがなかったので、食べ物や海、夕日、植物など多くの魅力ある地域資源があることに驚いている様子がみられた。大学のある地域への新たな魅力を知るとともに、関心をもつ機会になったと思われる。

浜益新モニュメント設置のため、企画会議（平成19年5月24日（第1回）、6月21日（第2回）、7月5日（第3回））がもたれた。企画会議はモニュメントのデザインや設置場所についての意見交換が行われた。7月5日の企画会議では、デザインや8月10日のモニュメント除幕式について、学生から「モニュメントの愛称を地元の人たちから募集して､除幕式で表彰するのはどうか」との意見が出て、地元の人からは「除幕式には、プロジェクトに関わった学生に司会・進行をしてもらいたい」、行政からは｢除幕式について、地元の方とどうするか話し合う機会を作った方がいいのではないか」とのコメントが出た。意見交換の時には、学生や担当教員、市職員の地域と一緒になって取り組んで行こうとする姿勢が見られた。実際に出た意見を用いて、愛称の募集企画などの活動が展開されていった。会議は、学生たちが自由に意見を言い合えるような雰囲気がつくられていた。

7月11日の地元事業者向け説明会(第2回)(区内観光事業者、区内主要団体、学生、モニュメント寄贈者、市職員…計22人)において、初めて学生・行政・地域住民が顔を合わせた、学生にははじめ緊張した様子もみられたが、話しはじめると緊張がほぐれた様子になり、自分たちの意見を住民や行政職員につたえた。学生からは｢地元の方々に愛着をもってもらうために、モニュメントの愛称は地元の方々につけてもらいたい｣｢地元の小学校や中学校で配布し、子どもたちに考えてもらうようにする。自宅に持ち帰って一日考えてもらうことによって、家族と一緒に考えながら決めることができ、親たちにもイベントやモニュメントにことを知ってもらえるのではないか」というような意見が出て、住民からは「あそこで設置場所は最適だと思うが、ハマナスがあるせいでモニュメントが活かされないのではないだろうか。」「ハマナスの撤去のお手伝いをしたい」という言葉や｢住民も新聞を見ていない人がいたら、わからない人が多い。もっと知っていたらみんなも寄付できると思う」というコメントがあった。また行政からは「交流を深め、みんながもっと自由に意見が言えるように、次は大学に地元の方々が来て、会議を行うのはどうか」との意見が出された。この説明会の後に、地元の民間事業者によってモニュメント設置場所の工事や、住民による草刈り、花壇の設置などが実現された。

8月1日には、藤女子大学花川キャンパスで新モニュメントの愛称審査会がA研究室の4年生3人の進行で行われた。応募された36件から藤女子大・地元事業者・寄付者らを含む関係者で選んだ秀作10件から投票により1位を決定した。学生にとっては、自分たちの企画がとおり、実際に住民行政が動いて実現した企画であり、かつ進行役などをおこない、企画力や表現力を養うことにもつながる体験になった。また、学生それぞれの達成感や実際に状況はかわるのだという自信にもつながったのではないかと思われる。地域住民にとっても大学に親近感をもてる機会をつくることにつながるのではないかと考える。

8月10日に浜益ふるさと公園で､新モニュメントの除幕式が開催された。司会・進行は担当教員のゼミ生の4年生3人が務めた。主にデザインを考案した3年生は、自分たちが考案したモニュメントを目の当たりにして、感動している様子がみうけられた。また、学生が自主的に手作りのお菓子を作り、出席者に手渡していた姿がみられ、自

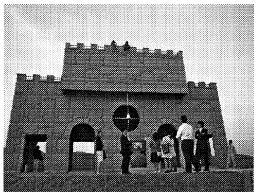
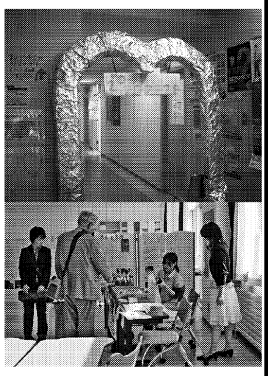
日	活動内容	活動の様子	生成された活動
2007年 3月	**市が「石狩市観光振興計画」を策定、厚田公園展望台「恋人の聖地」プロジェクトを重点プロジェクトに位置づけ**	 iロードマスターのスタジオ	地域ラジオでの石狩市の魅力発見活動への参加 あいロードプロジェクトに関連した地元モニュメント設置へのデザインなどへの参加 大学祭への主体的の参加 新たな活動の生成
4月	**地域FM局「さっぽろ村ラジオ」のサテライトスタジオ「石狩ｉラジオ」が開局「ｉロードマスター」放送開始** 市観光担当職員と学生が、厚田公園展望台の魅力をPRするとともに、あいロード（国道231号）沿線の飲食店や観光スポットを取材し、情報を発信していった。		
4月24日	**藤女子大学との「観光資源見学会」の開催** 藤女子大学人間生活学部の学生と市内の観光スポット約20ヶ所をバスで半日かけて視察する（藤女子大生、教員、商工会議所、北商工会、観光協会、等計22人）	 観光資源見学会	
5月25日	**藤女子大学で企画会議（第１回）開催** モニュメントのデザインや設置場所についての意見交換。第二回、第三回に続く会議となる。		
6月3日	**厚田公園展望台で「プロポーズの日」イベントを実施、同日、同展望台で初となる市内カップルの結婚式が開催される**		
6月21日	**藤女子大学で企画会議（第２回）開催**	 企画会議の様子	
7月2日	**浜益ふるさと公園にて新モニュメント設置場所の現地確認**		
7月4日	**浜益コミセンで地元事業者向け**		
7月5日	**藤女子大学で企画会議（第３回）開催** デザインや8月10日のモニュメント除幕式について		
7月11日	**浜益コミセンで地元事業者向け説明会（第２回）を開催** 学生・行政・地元住民が顔を合わせる機会となる		
7月16日	**JA北石狩青年部浜益ブロックのボランティア6人により浜益新モニュメント設置予定箇所の草刈りが行われる**	 浜益新モニュメント除幕式	
7月29日	**市内の民間事業者の協力により設置場所の基礎工事が行われる（31日には芝貼り）**		
8月1日	**藤女子大学にて「浜益新モニュメント愛称審査会」を開催** 募集概要：応募件数３６、平成19年7月18日～7月27日に、学校（浜益区小中高校）を通じ用紙を配布したり、区民向け回覧板で周知した。 開催場所：藤女子大学、 参加者：学生、浜益区内観光事業者、区内主要団体、モニュメント寄贈者、観光協会職員、市職員・・・計32人 司会・進行：4年生3人		
8月8日	**浜益ふるさと公園に市民団体が花（プランター）を寄贈**	 大学祭	
8月10日	**浜益新モニュメント除幕式開催** 参加者：モニュメント寄贈者、受納者（石狩市長）、藤女子大学関係者、市・観光協会関係者、プロジェクト賛同者、報道関係者、一般来場者 司会・進行：4年生3人		
10月7日	**藤女子大学の学校祭「藤花祭」で取り組みを紹介** 石狩市の観光パネル展・スイーツ企画のアイディア募集・缶詰製作体験・石狩物産販売を企画・実施		
	その後、地元業者とのスウィーツの共同企画開発や地元PR冊子の作成などの活動が生まれていった		

図１　「ishikari あいロードプロジェクト」の活動の流れ（2007年3月～10月まで）

表８　ヒアリング調査結果　その１

〈地域の人との出会い〉

・いろんな人に出会えた（Ⅰ－①）
・市役所の人とかMさんとか、あと浜益の青年会の人とかケーキ屋さんの人とか、たぶん普通に大学生活過ごしてたら、出会えない人たちで。（Ⅰ－②）
・学生さんたちは、人の横のつながりをつなぐ役割はかなり果たしました。和やかに人の輪をつくったっていうか。（Ⅲ－①）

〈地域の人に対する意識〉

・全然自分は考えたことがなかったので、親とかもそんな自分の住んでるとこもっと良くしようなんて思ってないだろうし、そういう人が周りにいたことがなかったので、本当にびっくりしました。（Ⅰ－③）
・漁師の方が自分の仕事のことについて熱く語って……。（Ⅰ－④）
・生まれてからずっと石狩にいるっていう人けっこういたので、あぁ本当に石狩が好きなんだなぁっていうのがわかりました。（Ⅰ－⑤）
・でもなんか自分のものを市のために投資するってやっぱり半端な額とか、お金がかかることだから、あぁ石狩好きなんだなぁとか石狩のために何かしたいんだなぁとか、すごいなぁとは思いました。（Ⅰ－⑥）
・観光の地域とし成功するためにはすごい大変なんだなぁって思いました。（Ⅰ－⑦）
・市役所の人は机に座って仕事してるっていうイメージがあったので、あんなふうに歩き回っていろんなことまでやってるっていうのは、すごい意外な感じはしました。（Ⅰ－⑧）

〈学生同士の関係〉

・４年生ともこれ（プロジェクト）なかったら関係なかったかもしれない。（Ⅰ－⑨）
・それにこういうことがないと、元々みんな仲いいけど、こんなにまでは仲良くなってなかった。（Ⅰ－⑩）

〈満足感、達成感〉

・自信にもなったし、ものをつくるってこういうことなんだなぁって思って。（Ⅰ－⑪）
・そういうものが残るってうれしいなって。（Ⅰ－⑫）
・やっぱり企画するので、ものが出来上がって出るまでは、本当に出来るのかなっていう……だけど出来上がって自分の名前あるしみたいな、なんかすごいちゃんと出来るんだっていう……。（Ⅰ－⑬）
・一体感、達成感みたいな。（Ⅰ－⑭）
・いろんな力が混ざり合うことの面白さはすごく感じる。実際にものができたときにすごい。（Ⅰ－⑮）

〈企画力、発言力〉

・企画力がついたかなってかんじ。（Ⅰ－⑯）
・成功例を経験して、自分たちで考えるっていうのができるようになったと思いますね。（Ⅲ－②）
・目で見たとき自分の言った言葉と、同じ色に例えばなったとしても、目とその言ったイメージって実際ものって違うから、どんだけ違うのかっていうのとか、そういうの経験するのって大きいだろうなっていうのがあって。みなさん意見全部言った方がいいですよって、そうやって言ってましたね。（Ⅲ－③）
・人と話して人のことを伝えるっていうのは、どれだけちゃんと情報をその人から取らなきゃいけないかっていうのは、プラスにもなってる。（Ⅲ－④）
・消費者の目線がすごく大事になってくるっていうのは思いました。（Ⅰ－⑰）

〈活動の位置づけ、時間〉

・最初どういうふうに大学で位置づければいいのか、市役所の人とちゃんと位置づけておけばよかった。（Ⅱ－①）
・どういうふうに参加できるかわからなかったので、ゼミと並行してやっていた。（Ⅱ－②）
・SAT もやってる人たちだったし、アルバイトもやっていたので、負担が大きいところもあったようだ。（Ⅱ－③）
・ラジオは４年生だけじゃ足りないから（前期にゼミの３年生は、授業が入っていたため）、うちのゼミ以外の人にもお願いして呼びかけたんだけど、結局は時間割りが合わなかったようだ。（Ⅱ－④）
・一緒にやってるってことは共通の時間が必要になる。（Ⅲ－④）

表８　ヒアリング調査結果　その２

〈体験する必要性の認識〉 ・大学で学んだ以上のことを自分が体験することができる。そういうことって大学で習ったことよりも、人生に残るよね。（Ⅱ－⑤） ・体験できる、直接触れられるっていうのはすごく大事。（Ⅱ－⑥） ・人間生活学科って人間生活を研究対象っていうか、教育対象にする学科だから、その地域の人たちの生活のあり方とかね、人間性とか、そういうのにどんどん触れていかなければいけない学科だと思うので、地域の活動をするってことは人間生活全体を捉える意味では、すごく大事なことなんだと思う。（Ⅱ－⑦） ・生徒さんにとっては、社会勉強するには最高。（Ⅲ－⑤） ・地域づくりに関わることが、学生にとってプラスになるっていうふうに学校側に思っていただきたいんですよね。（Ⅲ－⑥）
〈今後継続するために〉 ・私自身ちょっと整理して、学生に精神的なプラスαとかね、その満足感だけじゃなくて、大学のシステムの中に取り入れた方がいいのかなって考えてる。（Ⅱ－⑧） ・でも単位化すると嫌々でも行くって言う人も出てくるわけでしょ。やっぱりこういうのは自主的に積極的にやってくれるのが本当は一番いいと思うのね。（Ⅱ－⑨）

分類：Ⅰ…学生、Ⅱ…担当教員、Ⅲ…市職員、①～⑨は各意見の番号

主的に何かを生み出そうとする意欲と自信を垣間見ることができた。

10月におこなわれた大学祭「藤花祭」では、石狩市の観光パネル展・スイーツ企画のアイディア募集・缶詰製作体験・石狩物産販売を企画しおこなった。当初は進行中であるスイーツ企画のケーキを披露する予定であったが諸事情になり出来なくなったので、ishikariあいロードプロジェクトを知らない人に知ってもらうために活動のPRをしようと学生たちが自主的に計画し実施した。また当日実施した教室の場所が、人に気づかれにくい位置にあったのだが、学生たち自ら歩き回り売り子となって、石狩の地元企業の商品の「どら焼き」を販売している様子が見られた。活動を知ってもらおうという積極的・自発的な行動がうまれていっていることがわかった。

以上、活動をとおしてわかったことは、実際の企画に学生が携わる活動は、これまでかかわってこなかった、さまざまな社会の仕組みや、人々との出会い、現実の人間生活環境について知る効果的な機会となる。また、地域づくりに関する役割を与えることで、学生は最初はおそるおそる参加していたが、数ヶ月後には主体的に企画アイディアをだしたり、地域おこしのために自主的な企画を計画し実行する力や主体性を育んでいた。このような機会は、教育という側面から見ても、育みたい学生の企画力や表現力、主体性などの力を育む効果的な機会となると考えられる。

⑵　「ishikariあいロードプロジェクト」に参加した各主体のコメント分析

学生のコメントは、「いろいろな人に出会えたこと。市役所の人とか、あと、M氏（地元のキーパーソン）、青年会の人やケーキ屋さんとか。たぶん普通の大学生活をすごしていたら出会えない人たちで…」（表８Ⅰ－①②）、「地域に対する関心や愛着」を育んだ（表８Ⅰ－③～⑧）、「企画力がついた」（表８Ⅰ－⑯）と回答する人、自分たちが学んできた学問の一つ「消費生活」について「消費者の目線がすごく大事になってくるっていうのは思いました。実際に与えられる側の目線がすごく大事で、それを掛け合わせて作っていくモノって、きっと良いモノになるんじゃないかと思うようになったので、そういう仕事につきたいな、みたいな。」（表８Ⅰ－⑰）、という学習してきたこととつなげていこうという姿勢がみられた。

市の行政の担当者のコメントとしては、「人のつながりをつなぐ役割を果たしてくれた」（表８Ⅲ－①）、「僕らには考えられない自由な発想がいい。例えばモニュメントのデザインとか。関わったことで来てくれればいいなというのはある。」（表８Ⅲ－③）、「（授業の時間があって）時間がとりにくい。作り上げていく時間が必要。」というコメントが得られた。学生が地域づくりに関わってもらう

メリットとして、地域の人々をつなぐ媒介としての役割があること、学生独特のアイディアが地域づくりを前進させるものになる可能性があることという評価の一方で、時間的な制限があることで、活動に参加してもらうことが非常に難しい側面もあることがわかった。

A研究室のゼミ担当教員のコメントとしては、「地域づくりへの参加は、そのこと自体が体験型の学びとなり、とても効果的な学習が期待できる」こと（表8－⑤⑥）、また「人間生活という学問のなかで実際に地域の人たちの生活のあり方を捉えるにあたって、とても大事なものとなる」（表8－⑦）との意見が聞かれた。活動を進める上で、「最初に大学での活動の位置づけなどを明確にしなかったので（どのように石狩市役所と連携していくのか）話し合っておけばよかった、（はじめてのことで手探りで進めていったので）通常のゼミ活動との平行した活動となり、学生はアルバイトなどの学外での活動もあり負担が大きいところもあったようだ」（（表8－①～③））、「研究室で主に行ってきたが、活動人数が足りない活動もあった」（（表8－④））。などの意見が聞かれた。地域づくりへの関わりでは予想できない側面もあり、手探りで進める必要がある場合もあるが、最初に大学の活動にどのように地域づくりの活動を取り入れていけるのかを検討する必要があること。学生の負担も配慮しながら進める必要があることなどがわかった。

今後については行政から「協力関係が（さまざまな先生や学科と）行っているけど、どこがどうしているのかうまく整理できていないので、（連携）体制が（今後）うまく作れればいい。（今回の仕事のように）僕らの仕事は結果が見えづらいけれども、地域づくりに関わることが学生にとってプラスになれるように学校に思っていただきたい」（表8－Ⅲ⑥）という、連携体制に関して成果が見えにくいことへの課題があげられた。また教員のコメントからは「今後続けるなら（活動を単位がとれるものにするなど）大学のシステムの中に取り入れていく方向性が必要じゃないだろうか」（表8－⑧）。「じゃないと学生の負担ばかりが増える」（表8－⑨）というような、学生にとってメリットのある活動参加方法を考える必要性がわかった。

6．まとめ

以上、二つの調査から生活科学系大学における地域づくりへの参加について考察した。アンケート調査からは、生活科学系大学の中でも、細分化された分野ごとに専門性が違い、そのなかでも学生は各自の専門性を生かしながら様々な地域づくりへのアイディアを生み出すことができる可能性が見いだされた。しかし、地域に在住している学生があまりいないこと、また普段から地域とのかかわりが少ない学生にとって、地域づくりへの関心を持つことはなかなかできない状況なので、大学内の授業や活動の中に、地域とのかかわりを持たせるような機会をつくることで、学生の関心を高めていく必要があることわかった。

また「ishikari あいロードプロジェクト」の事例調査から、地域づくりへの参加は、学生にとっては表現力や企画力、主体性を育む機会となること、また行政にとっては行政職員だけでは得られない発想が生まれたり、地域の人たちをつなぐ媒介としての役割を担う存在となり、地域づくりにとっては効果的なキーパーソンとなりうることがわかった。大学教員からは地域社会にふれることは、学びの基礎となる実際の人間生活全般を知ることにつながり、体験を通じて学習できることは非常に効果的な学びの状況を作り出すことになると評価していることがわかった。

生活科学系女子大学で地域づくりを大学の活動にとり入れていくためには、学内の資源も活用しつつ大学のカリキュラムの中に取り入れて単位化していくなどの大学システムの中での工夫、および行政との間の連絡や、時間調整についての課題解決の必要性があることがわかった。

生活科学系大学の専門性は、地域づくりの現場で非常に大切なものであり、それぞれの専門性を生かしてどのような関わりや連携をしていくことができるのか、さらに他大学の例なども踏まえて検討していきたい。

謝辞：本研究にご協力いただいた、藤女子大学大学生のみなさま、および ishikari あいロードプロジェクト関係者のみなさま、教職員のみなさまに心より感謝申し上げます。

本研究は日本建築学会（「生活科学系大学が地域

づくりに参加していくことの可能性と課題：女子大学生の意識調査の結果から」学術講演梗概集F-1、2008、1077-1078）および日本家政学会（「生活科学系大学生の地域おこしへの参加についての考察」日本家政学会東北・北海道支部第53回研究発表会2008）で報告した内容をまとめ、さらに新しいデータや知見を加え検証しなおしたものである。

注

1）近年の生活科学系学会等の研究報告を見ると、「地域づくり（まちづくり）」に大学が参加していくということに関する報告事例は極めて少ない。一方建築・都市計画系の報告を調べると、様々な大学が、研究室などの取り組みとして地域づくりに参加している報告（例：大貝彰「大学都市計画系研究室のまちづくり支援の実態」日本建築学会大会学術講演梗概集No.7007 2005など多数報告例あり）等がある。生活科学系の大学では、産学の食品の共同開発や子育て支援、地域福祉など地域づくりにつながる活動が、実際には様々な大学で行われていると思われ、それらの活動をまちづくり活動として位置づけ、学術的に検証し報告していく必要がある。

2）沖田冨美子：「連載：ゆく言葉（家政学）／くる言葉（生活科学）」建築雑誌122号No.1569　p.42、2007年12月

3）「ishikariあいロードプロジェクト」とは、平成19年3月に石狩市が策定した「石狩市観光振興計画」の重点プロジェクトの一つであり、平成18年7月に「恋人の聖地・北海道内第1号」となった「厚田公園展望台」を象徴として、若い恋人たちをターゲットに「i」（市内の頭文字）、「あい風」（厚田区で古くから言われる、幸せを運ぶ海からの風）、「愛冠岬」（浜益区毘砂別の海岸にある岬）の3つの「あい」を基に、また、3つの「あい」を結ぶ国道231号を「愛の路：あいロード」と位置付けて、「オール石狩」で「あい」あふれる魅力的なおもてなしメニューを多数提供しようと企画している事業のことである。

4）石狩市役所ホームページ　http://www.city.ishikari.hokkaido.jp/index.html

5）石狩市経済部商工労働観光課、「石狩市観光振興計画書」、2007年3月